

氏名	鈴木 美賀子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第24号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 イスラーム写本絵画における金彩研究と応用 —シャイフ・ザーダ「宮廷歓待図」現状模写を中心に—
	研究作品題目 1) 現状模写メトロポリタン美術館蔵サーディー著『果樹園』写本挿絵シャイフ・ザーダ画「宮廷歓待図」 2) 想定復元模写クリーブランド美術館蔵サーディー著『薔薇園』写本の一葉 3) 想定復元模写メトロポリタン美術館蔵サーディー著『果樹園』写本より 4) エブル紙に箔散らし 作例一式 5) 花とエスリーミー 6) 『薔薇園』写本より 参考作品) 現状模写のための習作
論文審査委員	主査 教授 柴崎 幸次 副査 教授 関口 敦仁 副査 准教授 佐藤 直樹 外部 NPO日本トルコ交流協会 審査委員 代表 ヤマンラール・水野 美奈子

1 学位論文の要旨

本研究は、優れた金彩表現を伴うイスラーム写本絵画の模写を通し、その表現や技法・精神性を学ぶとともに、イスラームと日本の金彩表現を比較して絵画における金彩表現の在り様や美意識について一考を示し、作品制作に応用する。

本論の第1章の序論では、日本特有の発達を遂げた金彩例として截金と箔散らしの表現について触れる。截金は仏像仏画の装飾として僅かに受け継がれるのみであり、近年まで、その研究は仏画装飾の1つとして美術史家によって行われてきた。一方、イスラーム美術では金彩装飾を基とするタズヒーブ（文様絵画）という一分野が確立しており写本の挿絵として多く描かれた。両者を金彩という視点から捉え、研究することの必要性を述べ、模写という手法を用いて研究する意義や期待される成果について記した。

第2章は、イスラームの写本絵画と日本の古典絵画における金彩技法について、両者の表現や精神性を概観し、両者ともに荘厳技術として発展したこと、表現にも類似性が認められることを確認した。様々な文様で埋め尽くされるイスラーム美術の表現形式と、「装飾過多」、「美麗過差」という言葉で特徴づけられる截金の表現形式は、異なる文化を土台として発展しながらも文様装飾を神聖なものと位置付けており、多くの文様で加飾することが高次元の表現であると捉えたといえる。

第3章は、模写対象作品であるメトロポリタン美術館蔵「宮廷歓待図」と同じ画家シャイフ・ザーダによる3つの類似作品について、概要と原本調査、類似性を報告した。原本調査を行ったことで、事前に入手した画像では解らなかった色彩や金属画材による表現、細部の文様を確認した。また携帯型顕微鏡カメラでの撮影画像の検証から、截金に似た細い線を用いた金彩表現は金泥描きによるものであると判断した。

第4章は、模写に使用する基底材、色料、媒材について実証的に考察した。「宮廷歓待図」が描かれたとされる16世紀のブハラやその周辺地域で使用された写本絵画の材料について、現地での聞き取り調査、科学調査、文献調査を行い、それらに基づいてコットン紙の試作と色見本を作成した。調査からはサイジング材として米粉、小麦粉、アラビアゴム、卵白など様々なものが使用され、媒材についてもアラビアゴム、膠、卵黄、卵白などの可能性が挙げられたが、扱い易さと色料の発色を考慮して、模写にはアラビアゴムを媒材として用い、サイジング材はアラビアゴムと卵白による加工を再検討することとした。色見本を作成することにより、材料の性質が確認できたが、媒材の濃度や紙の磨き方といった疑問も浮上した。

第5章では、現状模写を行うにあたり、ラピスラズリ顔料の特徴、アラビアゴムの用い方、エスリーミー（蔓草文様）の形の確認のために習作を行った。前章で報告した色見本の作成と検討の結果から、媒材をアラビアゴムとし、サイジングには卵白加工を施した。アラビアゴムは分量が多いと亀裂や気泡ができ、発色が悪くなるという性質が認められた。卵白による加工は被膜力があり、サイジング効果と画面の光沢が得られ、多少の間違ひは水で消えるので書に適した方法といえる。主要な色料である金泥やラピスラズリ顔料の特徴も把握できたが、「宮廷歓待図」では多くの色が使われているため、更に他の色料を検討しながら模写作業を進める必要がある。

第6章では、これまでの調査、研究、習作制作をもとに「宮廷歓待図」の模写を行い、作業工程と完成後の所見について記述した。基底材を慎重に選択したつもりであったが、選定や加工が不十分なことで、細密な描写が難しかったといえる。紙の繊維に筆先が引っ掛かり、運筆がうまくいかない、墨が伸びないといった問題がおき、カラスロによる線引きにも支障があった。

色料の使用については、世界的にラピスラズリ顔料の製造が少なく、粒子の大きさと発色が合致する顔料の入手が困難であり、白色顔料は候補が多く選定が難しかったという問題点などが挙げられる。

技法については、緻密に描かれており、卓越した絵画技術を感じた。無駄な仕事は見られず、装飾、枠線引き、彩色の工程の全てが高い技術で行われたことを実感すると同時に、細部まで描き出そうとする画家の細やかで鋭い観察眼も読み取れた。イスラーム地域における最盛期の写本絵画技法は非常に高度で、日本ともヨーロッパとも違った特有の発展を示している。

第7章は、イスラーム写本絵画における金彩について、より理解を深めるために2種類のハルカーリー作品の想定復元模写、ザル・アフシャーン（箔散らし）とエブル紙を組み合わせた例を作成した。更に応用としてハルカーリー、エスリーミー、截金を用いた作品を制作した。黒変した銀泥と思われる部分を想定復元したことにより描かれた当初の美しさが鑑賞可能となった。またザル・アフシャーンの作例を制作することで、印刷では

わからない金属画材の華やかさ、豪華さを付加するという効果を確認した。他方、金属箔の表現の種類や実施に関しては今回の調査からは明らかになっておらず、箔散らしの事例や具体的な方法について、更なる調査の必要性がある。応用作品の制作ではイスラームの文様や絵画技法の活用が可能であることを示し、新たな創作活動の展開や、日本美術における文様を中心とした絵画の確立への指針を得た。

第8章は本研究の結論である。本論を総括し、今後の課題と展望、所感を述べる。本研究は模写という方法を用いて、これまで美術史の分野で行われてきたイスラーム絵画の研究に新たな方法を提示した。模写を行うことで、文献に記されている方法を実践し、それが実現可能なのかなど多くの事が検証できたと考える。しかし、金属箔の表現の種類や実施に関しては今回の調査からは明らかになっておらず、箔散らしの事例や具体的な方法について、更なる調査の必要性がある。科学調査や原本調査の調査研究は個人で行えるものではなく実践的研究が継続的に行われる為にも芸術大学に専門の科が設置されるなどの環境の整備が望まれる。今後こうした研究例が増え、情報を共有することができれば、イスラーム美術の絵画技法の解明が進むと推測される。日本にはイスラーム写本絵画の最盛期に描かれた緻密で優れた作品を一般公開する美術館はないため、研究的な模写を行うことは資料作成の観点からも、イスラーム美術の普及という点からも必要と考える。

補遺として、模写対象作品が属するペルシア語文化圏で描かれたイスラーム写本絵画の海外調査について記した。ウズベキスタンの現地調査では写本制作が最盛期であった頃の高度な絵画技術で描かれた写本絵画は、現在、散逸して確認することができなかった。他の海外美術館においてその例を見ることができ、イスラーム写本絵画への理解を深めた。

2 学位論文審査の要旨

鈴木美賀子の「イスラーム写本絵画における金彩研究と応用」は、現在では不明な点も多いアジアにおける金彩技法と表現の解明を目指し、16世紀にブハラで制作されたミニチュール作品、シャイフ・ザーダ画「宮廷歓待図」の現状模写を中心に、イスラーム写本絵画の歴史・素材・技法等を調査し、高度な金彩技術の習得を通してそれを生み出した精神文化への理解を深め、自身の創作へと応用を試みる研究である。イスラーム写本絵画は近代より前の技術が断絶しており、制作当初の素材や技法を実証的に調査実験して復元を試みる研究は事例が極めて少なく、高度に独創的な実践的研究である。

【論文】

第1章序論に続く第2章から5章において、模写制作の前提となるイスラーム写本絵画とその金彩技法に関する研究をまとめている。2章では日本の古典絵画とイスラーム写本絵画の金彩表現を比較し、宗教的な精神性のあらわれを指摘する。3章は模写対象作品のシャイフ・ザーダの熟覧調査を関連作品も含めて詳述する。4章では基底材（紙）・色料・媒材について、ウズベク語書籍を含む幅広い文献資料を渉猟し、複数の素材を用いて実験を繰り返しながら、サンプルを制作して復元的な考察を重ねた。歴史研究や科学分析だけでは得られない実践的手法にもとづく貴重な内容であり、今後この分野における基礎データとなる検証成果が示された。第6、7章は、模写のための習作から現状模写の制作実施、金彩を用いた作例の復元模写の工程などが示され、さらに応用としての作品制作の状況が

提示されている。制作工程の報告もまた前例の稀な重要な事例である。第8章で全体をまとめながら今後の展望を述べる。また、補遺としてイスラーム写本絵画に関する海外調査の詳細をまとめ、手堅く充実した内容の論文として仕上がっている。

【作品】

研究作品は、多くの調査に基づき制作されてきたが、研究の中心であるシャイフ・ザーダの現状模写《研究作品1》や、ハッルカーリー作例の想定復元模写《研究作品2、3》は、非常に精緻な表現がどのようにして生まれてきたのかを探求しながら、丹念に制作されている。エブル紙に箔散らし、及び応用作品《研究作品4、5、6》は、研究の知見をさらに深める制作であり、イスラーム写本絵画において制作当時の技術を振り返り、忠実に復元に取り組む実践的研究成果は、国際的に見ても新規性がありオリジナリティが高い。

【口頭発表】

口頭発表では、論文の章立てに従い、研究から試作、現状模写、想定復元模写の制作や応用作品への発展に関して、展示の作品成果や研究資料も参照しながら発表を行った。特に、制作時において、不明なことが多い中、手探りで多くの検証を行った過程や、そこで得られたことなど具体的に説明し、実践を伴う研究内容がわかりやすく報告された。

以上のように、鈴木美賀子はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表に基づき、口頭試問等により最終試験を実施した。

全体として、調査や実践的研究が高いレベルで実施され、論文と作品成果に結実させることができたと判断した。失われた技術の再現は、文献や伝承どおりに実施しても容易なことではないが、国内外で可能な限りの調査を実施し、自らの試行錯誤を行った研究態度は芸術系博士研究として充実した内容であったと、審査員全員一致で確認することができた。

また、研究全体を振り返り、自らが精細な作品を細部まで丁寧に仕上げる過程を通じて得られる境地から様々な気づきがあり、装飾絵画の高い芸術性への理解を深めたことなどの自覚からも、この分野において高い表現力と知を獲得したと判断できた。よって、国際的にも前例が少ないイスラーム写本絵画研究を通じた金彩研究として貴重な成果を示すことができたと評価した。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。